



あいかわ



農業委員会だより

第80号

令和4年1月15日発行

発行：愛川町農業委員会

編集：あいかわ農業委員会だより編集委員会

愛川町角田251-1

Tel 285-2111(代)



明けましておめで
とうございます！

年末年始を彩る寄せ花（半原：愛川園芸にて）

新年を迎えて

農業委員会会長 熊坂 博

新年明けましておめでとうございます。

皆様には、ご家族お揃いで新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

さて、昨年は、新型コロナウイルスの予防接種が行われるなど、新規の感染者が著しく減少し、少しずつ落ち着きを取り戻して来たところでありましたが、年末になって新たな変異ウイルスの感染確認や、全世界を対象に新規入国を原則一時停止するなど、依然先行きが不透明で、予断を許さない状況となっているものと感じております。

農業委員会としましては、改めて感染防止対策を講じながら、地域に根差した活動を推進してまいりたいと考えております。皆様方の更なるご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます、新年のあいさつとさせていただきます。

紙面紹介

- 2面 農林業施策の町への要望・静岡産業大学あいかわ準農家視察
- 3面 みどりの食料システム戦略・ちよつとひと息
- 4面 まちかどりぼーと（ストロベリーハウス・てんとファーム）

・表紙の写真

農地利用最適化の推進に関する町への意見・要望

農業委員会は、農地等利用最適化の推進及び農林業施策・予算に関する意見・要望を、町に行っておりです。本年度も令和4年度に向け、町への意見・要望を提出しました。主なものは次のとおりです。

1 農地保全・有効利用対策

◆農地造成について、適切な埋め立て等を推進する条例の制定（または既存条例の改正）について、早期実現のための必要な体制の構築

2 農業経営安定化施策

◆農業者が加入する収入保険への加入を奨励する制度の新設

3 畜産経営環境保全対策

◆畜産経営上発生する臭気及び汚物関連浮遊物に対するきめ細やかな対応

4 山林の立ち枯れ対策

◆ナラ等の木の立ち枯れが目立っている対応策の検討

5 有機農業の推進

◆畜産業で使用する輸入飼料の規制の検討



町長（左から2人目）に会長から提出

静岡産業大学が「あいかわ準農家」の視察に来られました。

昨年十一月に、静岡産業大学の堀川学長補佐が、あいかわ準農家のことについて、視察に来られました。大学がある藤枝市でも同様の制度を持っているというので、詳しく知りたいとのことでした。

Q あいかわ準農家は、どのくらいの登録があるのですか？

A 制度が始まって二年が経ちましたが、現在、五十名を超える登録を得ています。

Q すこい登録者数ですね。同様の事業を行っている自治体がありますが、結果が出ていません。課題はありますか？

A 課題は、準農家と貸し出す農地のマッチングですね。現在すべての準農家に、農地を貸し出せていません。

Q 準農家と農地のマッチングもハードルが高そうですね。いろいろ勉強になりました。ありがとうございました。

終始円満に進んだ会談でした。こちらも静岡県や藤枝市の状況をお伺いでき、大変勉強になりました。最後に、お茶やサッカーで有名な藤枝市。ぜひご家族でいらしてくださいねとおっしゃっていただきました。



左側が、堀川学長補佐
（愛川町役場にて）

あいかわ準農家制度の運営に大切なのは、「農地」です。大切な農地をお預けください！詳細は、農業委員会まで、ご連絡いただくと助かります！

みどりの食料システム戦略

農林水産省は、令和3年5月に、持続可能な食料システムの構築に向け、中長期的な観点から、調達、生産、加工・流通、消費の各段階の取組とカーボンニュートラル等の環境負荷軽減の革新(イノベーション)を推進する「みどりの食料システム戦略」を策定しました。

★「みどりの食料システム戦略」が目指す姿と主な取組概要は①～③のとおりです。

①**化学農薬**→2040年までに、ネオニコチノイド系農薬を含む従来の殺虫剤を使用しなくてもすむような新規農薬等を開発により、2050年までに、化学農薬使用量(リスク換算)の50%低減を目指す。

②**化学肥料**→2050年までに、輸入原料や化石燃料を原料とした化学肥料の使用量30%低減を目指す。

③**有機農業**→2040年までに、主要な品目について農業者の多くが取り組むことができるよう、次世代有機農業に関する技術を確立する。これにより、2050年までに、オーガニック市場を拡大しつつ、耕地面積に占める有機農業(国際的に行われている有機農業)の取組面積の割合を25%(100万ha)に拡大することを目指す。

調達

持続可能な資材や
エネルギーの調達

消費

環境にやさしい持続可能な
消費の拡大や食育の推進

みどりの食料システム戦略

革新(イノベーション)等による持続的生産体制の構築

生産

ムリ・ムダのない持続可能な加工・
流通システムの確立

加工・流通

★前回の第79号で特集した「**有機農業**で大事なものって？」において、「**土壌**」の大切さを述べております。農林水産省が策定した「みどりの食料システム戦略」においても、**有機農業**について、2050年までに目指す姿と取組方向が示されていますね。愛川町でも、新規就農者やあいかわ準農家で、**有機農業**を希望されている方が多いです。**有機農業**の側面からも、持続可能な(サステナブル)食料システムの構築を目指していきましょう！



ちょっとひと息

「錦鯉との出合」 M・S委員

愛川町に移り住んで早五十年振り返れば色々あるが鯉との出合が一番わすれられない記憶になりました。三十年前に知人の家の庭池の鯉の人懐っこさに魅せられて、自分も飼いたいと思いコンクリートブロックで四角い池を作り鯉屋さんに買いに行ったのがはじまりでしたが、飼育方法も知らず買っては死なせの繰り返しで錦鯉の飼育書を買って読み漁り、研究もしました。三年ほどして飼育が少しわかりだすと最初の池ではものたりなくなり改造して少し良い鯉を飼うようになりました。すると鯉屋さんから錦鯉の品評会がある事を知らされて見に行く様になり二度・三度と見に行くうちに自分も出品したくなり小さな品評会に出品したら優勝してしまい本格的にのめり込んでしまい池も本格的に錦鯉用に作り直し鯉も品評会用の錦鯉を買い求めるようになり毎年将来有望な若鯉を新潟に運び委託飼育をしています。最近、高齢になり新潟通いがキツイと思うようになり鯉飼育をそろそろ辞めようと思いつつもなかなか辞められないのが錦鯉の魅力・魔力なのです。

優勝

まちかどりぽーと（ストロベリーハウス、てんとファーム）

新たな就農者であります「ストロベリーハウス」と「てんとファーム」をご紹介します。

まず、角田の仙台下にオープンした、イチゴ農園「ストロベリーハウス」です。

現在、約1500㎡のビニールハウスでイチゴの「紅ほっぺ」を栽培しています。ビニールハウスの中は暖かく、蜂を飛ばしておりました。蜂はマルハナバチで、ハウスの中に約1600匹おり、花が咲きそうなときに受粉させ、イチゴの形をよくするそうです。

代表の山田尚さんは、ほとんど休みなくハウスに通い、「イチゴを苗から育てることで、栽培スキルを磨いています。」とのことでした。

また、「今後は、町内

代表 山田 尚 さん



の農家と、よりつながりを持って、この場所で末永く農業をしていきたい。」とのことでした。



次に、相模原市で就農をされ、今後は愛川町でも農業を展開していきたいと希望されている「てんとファーム」です。

代表の佐藤公紀さんは、現在、愛川町角田で畑や田を借りて耕作し始めたところであ

りますが、できれば愛川町で農業を拡大させていきたいとのこととありました。「地域の方と協力させていただいて、成長していきたいと考えております。よろしく願います。」とのことでした。

また、「農地（畑や田んぼでも）を貸していただければ、一生懸命耕作します。」とおっしゃっておりました。



代表 佐藤 公紀 さん



表紙の写真

「年末年始を彩る寄せ花」

半原にある愛川園芸を取材しました。当日は、天気も良く暖かめの日でしたが、撮影したビニールハウスの中は、よりほっこりした空気につつまれていました。写真の寄せ花は、パンジー、ハボタン、ピオラとのことです。色鮮やかでバランスの良い寄せ花に、心がなごみ、落ち着かせてくれます。今年が健康で、平穏でありますよう、この1枚を選びました。

編集委員

委員長	高木 正徳
副委員長	落合 貢
委員	熊坂 博
委員	榎本 計雅
委員	諏訪部 衛人
委員	花上 満
委員	加藤 一男